

## 総評

### <特に評価の高い点>

#### 1、「支援する職員の思いと支援」

職員は生活の中で様々なことを子どもに伝えています。それは、これから子どもがひとり立ちするために必要な日常生活のこまごましたことであったり、社会の常識だったりします。子どもの将来を思って口頭だけでは伝わりきらないことは、文字にしてトイレの壁に貼っています。含蓄のある文章は、その時に入居している子どもと話しあって決めることもあります。

子どもが学校や職場から帰宅しての夕食時間は、一人ひとりに合わせているので一定ではありません。支援員が調理で台所に立っているところへ居合わせた子どもは、献立と食材に関心をもって傍に寄っていきます。「今晚のおかずはなあに？」と尋ねる子どもに、さりげなく調理の仕方を見せています。

利用者調査のインタビューでは頑なな印象だった子どもが、訪問調査時には笑顔で自室を見せて質問に答えてくれました。僅か2カ月余で入居時からの変容をはたしたのは、子どもに対する職員の思いと支援の結果です。

自立援助ホームには、子どもながら多くの艱難を背負って入居しています。自立生活援助計画の途上で退居する子どもも少なくありません。しかし、職員はどんな理由の退居でも子どもを笑顔で見送ってきました。

設立5年の間に旅立った子どもの中には、自分の子どもを連れて遊びに来ることもあります。これも入居中の職員の支援と思いが子どもの中に残っていたからでしょう。これからも続く、職員一人ひとりの子どもへ対する思いと支援のきめ細やかさを高く評価します。

#### 2、「経営姿勢」

「陽だまり」では、平成31年度から始まる中・長期計画の策定に当たっての試料として、開設5年目となる当年度までの運営状況の総括をする取り組みが行われています。そのなかでは共通評価基準の自己評価に加えて、第三者評価の受審も計画され実行されています。サービスの質向上を目指し、且つ、長期的視野に立った事業を実現していくという高い経営姿勢があります。

## <更なる質向上のために>

### 1 「短い入居期間に適した計画立案」

児童自立生活援助計画の作成時には、日中と夜間の支援員の詳細な情報を活かすようにしています。計画の提出先である児童相談所によっては、一時保護も含めて応答等のレスポンスの遅滞があります。そのため児童福祉施設としては計画立案とアセスメントが短期期間とならざるを得ず、自立援助ホームの機能が十分に活かせません。短期目標のアセスメントは、入居期間が短いほどに重要です。自立生活援助計画の作成及び支援経過、目標の評価等を明確にして十分な見直しをするためにも、今後は計画作成時に子どもと十分な話し合いを持つことに期待します。

### 2、「記録と計画の連動性」

「業務日誌」及び「養護記録」には子どもの様子が記載されています。また、ホーム長が行った支援は「養護記録（別紙）」として記録されています。毎月行っているミーティング記録や引き継ぎノートも子ども一人ひとりの様子が綴られています。このような詳細な記録も自立生活援助計画の目標との連動性が見えないため、目標への支援経過と評価も不明瞭になっています。そのためアセスメントも不十分となっています。子どもへの支援が適切であったかの検証もアセスメントとなり重要です。自立生活援助計画と養護記録、ミーティング記録は、それぞれ十分な連関性があることで支援の根拠になるので、今後の取り組みに期待します。